平成31年3月7日　日刊産業新聞

産業用、値崩れ深刻化

重量物、解体も負担に

鉛電池スクラップ

産業用電池スクラップの値崩れが深刻化している。鉛蓄電池全般の値下がりに加え、重量物であるための扱い敬遠、解体作業の負担の大きさ、樹脂スクラップの売り先難などの複合要因が重なった。市中取引価格は現在キロ10―20円どころと、自動車用を下回る低価格に落ち込んでいるもよう。逆有償化による回収率の低下も懸念されそうだ。

ビル・マンション・商業施設の非常用電源などに使われる産業用電池は、鉛含有率では自動車用を上回り、有効なリサイクル原料として回収されていた。自動車用の電池スクラップ価格が高騰した2017年後半には、産業用もキロ100円近い取引もあったが、ここ1年以上は下値を探る展開が続き、自動車用に対しても先行安をたどっている。

足元の市中相場はキロ20円を下回っているが、二次精錬メーカーの解体能力も不足して引き取り手がないため、「売り物があっても値がつかない状況」（扱い商社）とノミナル化の様相。産業用電池は大型から小型までラインナップは多様だが、サイズにかかわらず軒並みダウン。毎月10円安のペースで30円前後まで急落している自動車用からも下げ圧力を受けている。

値崩れの理由には、運送・解体事情の悪化がある。自動車用と比べて大型の産業用は、ハンドリングや解体にクレーンが必要なことが多い。さらにトラックへの上げ降ろしの負担も大きく、電池スクラップ全般が余剰となっている今、産業用の回収優先度は低下している。現在の10円台では、高騰する運送コストをねん出するのが精いっぱいで、置き場価格は事実上ゼロに近くなっている。

回収優先度が低下している産業用鉛電池

もう一つは、解体とともに発生する電池ケースの樹脂スクラップも値崩れしているためだ。中国の輸入禁止措置の影響で、ABSなどの樹脂スクラップの売却益が縮小。「ABS樹脂は堅く粘りがあるので、解体が大変。その上に売れないとなると、産業用を解体する魅力がますます下がる」（二次精錬メーカー関係者）と解体意欲は低下。結果的に買値にも反映されなくなっている。

ある市場関係者は、「自動車用を含めた急速な荷余りで、一時的に逆有償になる可能性も否定できない」と話す。もしそれが現実になれば、産廃処理業者資格が持たなければ取り扱いができなくなり、回収に一層制約がかかることになる。自動車用と比べて鉛実収率が高い産業用電池スクラップだが、予想を超える急速な値崩れによって、リサイクル体制の維持に黄色信号がともり始めている。